

第1章 概観（国土、民族、気候、社会、歴史等）

1. 正式国名

トルコ共和国（Republic of Turkey）。トルコの国旗は新月旗と呼ばれ、赤地に白の新月（三日月）と五芒星を配した旗である。1844年に制定されたオスマントルコ（1844-1923）の国旗デザインをほぼ踏襲している。現在、三日月と星はイスラム教の象徴として用いられることもあるが、アナトリア半島地域においてはイスラム教普及以前から使用されていたとされている。



2. 人口

2013年の総人口は76,667,864人¹。イスタンブールのあるマルマラ地域に人口の約1/4が集中し、経済活動の中心地域となっている。2013年時点での主要都市別人口概数は、イスタンブール（1,416万人）、アンカラ（504万人）、イズミール（406万人）、ブルサ（274万人）、アンタルヤ（215万人）である。また、総人口の約半数が30歳以下の若年層であるなど、豊富な労働力を有することに特徴がある。

3. 国土

トルコは地中海、エーゲ海、マルマラ海、及び黒海に囲まれたアナトリア半島に位置する国家である。国土面積は日本の二倍強の広さを持つ783,562.38 km²であり、マルマラ、エーゲ海、地中海、南東アナトリア、東アナトリア、中央アナトリア、及び黒海といった7カ所の地理的地域に分けられる。

¹ トルコ統計局推定

図表 1 トルコの地域区分

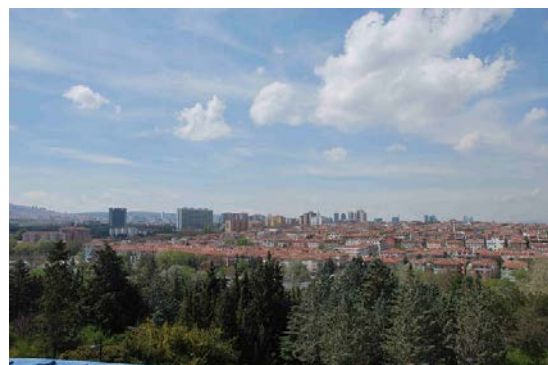
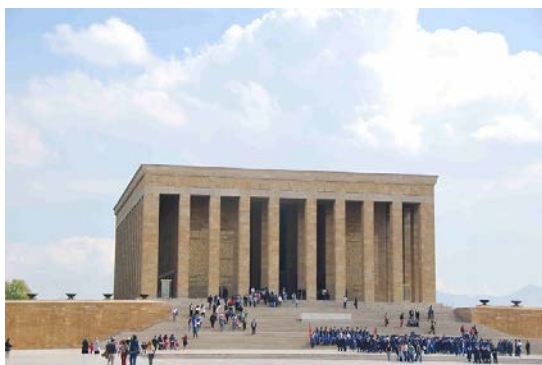


(出所) 各種資料より作成

4. 首都

トルコの首都はアンカラ (Ankara) である。オスマン帝国衰退期の 1920 年、イスタンブールを脱出したオスマン帝国議会議員たちが権利擁護委員会のもとに合同し、アンカラ政府を樹立したことに起源を持つ、1922 年のトルコ革命後、1923 年に首都として遷都された。なお、経済の中心地であるイスタンブール (Istanbul) は、オスマントルコ時代の首都であり、バルカン半島では最大規模の人口を有している。

写真 1 アタテュルク廟 (左) とアンカラ市街 (右)



5. 気候

広い国土を有するトルコの気候は、地域によって特徴がある。エーゲ海、地中海沿岸地域は温暖な地中海性気候に属し、温暖乾燥な気候に特徴がある。マルマラ海周辺等のヨーロッパ隣接地域は温暖湿潤気候と地中海性気候の中間に属し、夏には涼しく冬には積雪も見られる。中央アナトリア地方はステップ気候や高地地中海性気候に属し、夏は高温乾燥であるが、冬には積雪も多く気温がマイナス 20 度以下になることもある。東アナトリア地方は亜寒帯に属し、冬は非常に寒さが厳しく 1 月の平均気温がマイナス 10 度以下になる年もある。

6. 民族

全人口の約 80%がテュルク族系のトルコ人であり、その大半がイスラム教徒である。他には、クルド人、アルメニア人、ギリシャ人、ユダヤ人等が存在する。

写真 2 イスラム教寺院ブルーモスクとその内部



7. 通貨

トルコの通貨はトルコ・リラ (TRY) であり、2014年8月現在、1リラ=約47.65円、1円=約0.02リラである。

図表 2 トルコの通貨 (紙幣)



(出所) トルコ共和国中央銀行ウェブサイトより作成

8. 言語

トルコの公用語はトルコ語 (テュルク諸語に起源を持つ) であり、文字としてはラテン・アルファベットが用いられている。

9. 宗教

イスラム教 (スンニ派, アレヴィー派) が総人口の 98%を占めている。その他にはギリシャ正教、アルメニア正教、ユダヤ教が信仰されている。ただし、法制度上は政教分離原則に基づく世俗主義が採用されている。

10. 歴史

トルコはヨーロッパ世界とイスラム世界の結節点として、重層的な歴史を有する。アナトリア高原においては、紀元前 18 世紀にはインド・ヨーロッパ語族によるヒッタイト王国が建国され、紀元前 14 世紀まで繁栄を続けた。紀元前 6 世紀にはアケメネス朝ペルシャの征服を受け、紀元前 4 世紀にはマケドニア王国のアレクサンドロス大王の征服を受けた。アレクサンドロス大王の死後、セレウコス朝シリアの支配下に入った。紀元前 191 年頃共和制ローマとのローマ・シリア戦争に敗退し、ローマ帝国期には属州として再編された。

一方、エーゲ海地方においては、ギリシャ人によるミケーネ文明が栄え、紀元前 7 世紀頃にはビザンティウム（現在のイスタンブール）を中心とする国際都市が地中海各地に開かれてきた。西暦 330 年、ビザンティウムがローマ帝国の首都として遷都され、コンスタンティノープルとして改称された。395 年のローマ帝国分裂後には、東ローマ帝国の首都としてコンスタンティノープルは繁栄の道を辿った。

6 世紀には、ササン朝ペルシャ等からの侵攻を受けて東ローマ帝国の領土は縮小し、現在のギリシャ及びトルコを中心とする国家へと変貌を遂げた。7 世紀のペルソ・テュルク戦争で多くのテュルク族がササン朝ペルシャの捕虜となったが、651 年のササン朝ペルシャ滅亡後には、マルムーク（奴隷身分の騎兵）としてテュルク族は遊牧民生活を送ることとなった。

1038 年、マルムークは大セルジューク朝を樹立し、1055 年にはアッバス朝からスルタンの地位を授与された。1071 年、大セルジューク朝は東ローマ帝国を破りアナトリア高原に進出し、地方政権である小セルジューク朝を成立させた。以後、アナトリアにおけるイスラム化が進行していった。1241 年に、小セルジューク朝はモンゴル帝国の進攻を受け、アナトリアは複数の君侯国に分裂していった。

1299 年、アナトリアの西北部に起源を持つオスマン帝国は領土の拡大を続け、テュルク族による支配を拡大させていった。1453 年、オスマン帝国はコンスタンティノープルを陥落させ、東ローマ帝国を滅亡させた。16 世紀にオスマン帝国の繁栄は最盛を極め、アルジェリア、ハンガリー、イラン東部、イエメン、ウクライナ南部にまで領土を拡大させた。ただし、帝国が拡大するにつれて帝国のアイデンティティは分裂し始め、構成民族による民族意識が顕在化していった。

1683 年、オスマン帝国はオーストリア侵攻に敗退し、1699 年にはカルロヴィッツ条約に基づいてオーストリアに対して領土を割譲することとなった。以降、17 世紀末から 18 世紀にかけては軍事的衰退が表面化し、帝国の威信は低下していった。

18 世紀後半以降、オスマン帝国は衰退の一途をたどることとなった。幾度もの露土戦争の結果として領土をロシアに割譲し、ギリシャ独立戦争やエジプト・トルコ戦争を経てギリシャ及びエジプトが事実上の独立を果たしていった。さらに、ロシア、オーストリア、イギリス、フランスのバルカン地域に対する勢力均衡の結果、いわゆる東方問題が生じ、

バルカン地域において諸民族が独立を次々に果たしていった。1853年のクリミア戦争では西欧列強の支援の下でロシアを破ったものの、戦時支出と西欧列強への借款の増大から帝国財政は急激に悪化し、1875年には財政破綻をきたした。19世紀末までに、オスマン帝国の領土はバルカンの一部とアナトリア、アラブ地域に限定されていき、「瀕死の病人」と呼ばれるに至る。

1908年、帝国の衰退に危機感を強めたマケドニア駐留軍が蜂起し、青年トルコ革命が発生した。革命の結果、憲政が復活し、1913年には統一派政権が成立した。統一派政権は汎スラブ主義に対抗するためにドイツ帝国との同盟関係を強化し、第一次世界大戦では同盟国側の立場にたって参戦する。結果、1918年10月にオスマン帝国は連合国に降伏し、1920年のセーブル条約受諾により帝国の解体は決定的なものとなった。

連合国がイスタンブールを占領し、ギリシャ軍がイズミールに迫る中、第一次世界大戦の英雄であるムスタファ・ケマル将軍（後の尊称：アタテュルク）を議長とした大国民議会がアンカラで開催された。大国民議会は、アタテュルクの指導の下、大祖国戦争と呼ばれる国土回復運動を展開していった。1923年には、連合国との間にローザンヌ条約を締結し、トルコの独立承認とともに関税自主権回復、治外法権撤廃など不平等な国際関係を廃止することに成功した。同年10月、アタテュルクは共和制を宣言し、大統領に就任する。トルコ共和国の成立であった。

トルコ共和国成立以降、アタテュルクはシャリーア（イスラム法）の撤廃やメドラサ（イスラム学院）閉鎖など、世俗主義を推進していった。また、共和主義、世俗主義、法治国家、社会国家という4つの基本精神を持つ憲法が制定され、統治機構における宗教の排除が行われることで近代国家としての形成が進んでいった。

第二次世界大戦では、当初中立を標榜していたが、枢軸国の敗色が決定づく中で連合国の要請により対独参戦を決定した。戦後、1950年代には、冷戦構造が顕在化する中でNATOへ加盟し自由主義陣営との協調を深めていった。また、コチヤサバンジュなどの企業グループ形成が進み、財閥へと発展していった。1970年代には、経済面では財閥が台頭するとともに、政治面では左右対立によるテロが相次いで発生した。また、キプロスのギリシャへの帰属をめぐるキプロス問題を通じて軍事費が増長し経済停滞に陥り、インフレが進行した。

結果として、民族運動や学生運動の機運の中で極右勢力やイスラム勢力が台頭し、トルコ社会は混乱に陥った。トルコ国内の社会的混乱を踏まえ、1980年には、軍が政治に介入し、クーデターを起こした。クーデター後、二院制が一院制に変わるなどの憲法改正が行われ、治安と経済が改善されていった。ただし、クーデターの結果、極左勢力やクルド人勢力によるテロは増加することとなった。

1987年にはECに加盟申請をおこない、ヨーロッパの一員としての姿勢を明確化した。1989年には文官出身のオザルが大統領に就任し、文官統治が推進されることとなった。1999年にはEU加盟候補国としてEUから認定され、2005年には加盟交渉が行われるこ

ととなった。

このように、90年代後半はイスラム主義勢力が政局に台頭してきた時期でもあった。イスラム主義政党は離散集合を繰り返し、2001年には美德党が解散し公正発展党（AKP）と至福党（SP）が成立する。2002年の総選挙では、公正発展党が中道右派勢力を取り込むことで単独過半数を達成し、現在に至る。

11. 教育

トルコの教育制度は教育省が所管しており、学制としては4・4・4・4制が敷かれている。義務教育期間はかつて5歳6ヵ月から13歳までの8年間であったが、2012年以降には高等学校4年間を含む12年間に延長されている。学校年度は9月中旬に始まり、6月中旬に年度を閉じる。

(1) 義務教育

学校には、日本の小・中学校に相当する初等学校（8年）と、高校に相当する高等学校（4年）、大学（4年）若しくは職業学校（2年）があり、いずれにも公立校と私立校がある。

公立の初等・高等学校は無試験で入学でき、授業料及び教科書は無料である。私立の初等学校の入学は抽選により決定され、2・3年生の編入は面接試験、4年生以降の編入は試験による。外国語教育は、公立校では第4学年から英語の授業がある。私立校では、通常、1年生から英語の授業が行われ、5学年から第二外国語の選択授業がある（例：ドイツ語、フランス語、スペイン語）。大学の入学試験は、TM（トルコ語・数学）、TS（トルコ語・社会）、MF（数学・物理）、Dil（言語）の4種類のうちから1つを選択する。高等学校のカリキュラムもこの選択に従って、各生徒が学校のアドバイザーから指導を受けて作成する。入学できる大学は、全国統一テストの結果（点数）と受験者の希望順位により決定される²。

(2) 高等教育

トルコには私立71、国立108の計179校の大学が教育活動を行っており、トルコの大学進学率は33.06%である³。最も、多くの大学が立地するのはイスタンブールであり、次頁表に示す計49校（私立38校、国立11）が存在する。

² 日本外務省ウェブサイト 「諸外国・地域の学校情報」
http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/06middleeast/infoC61200.html

³ 日本外務省ウェブサイト 「諸外国・地域の学校情報」

図表 3 イスタンブールに立地する大学一覧

国立大学	私立大学			
ボアズィチ大学	アジュバーデム大学	イスタンブル・アレル大学	イスタンブル商業大学	コチ大学
ガラタサライ大学	バーチェシエヒール大学	イスタンブル・アイドゥン大学	イスタンブル 5 月 29 日大学	イエディテペ大学
イスタンブール大学	ベイケント大学	イスタンブル情報(ビルギ)大学	マルテペ大学	新世紀(イエニ・ユズユル)大学
イスタンブール工科大学	ベズミ アーレム財団大学	イスタンブル科学(ビリム)大学	MEF 大学	スレイマン・シャー大学
マルマラ大学	ビルニ大学	イスタンブル・エセンユルト大学	ムラット・ハダヴェンディガル大学	カディル・ハス大学
ミーマール・スイナン芸術大学	ドーウシュ大学	イスタンブル発展(ゲリシム)大学	ニシャンタシュ大学	
ユルドゥズ工科大学	ファティヒ・スルタン・メハメット財団大学	イスタンブル・ケメルブルガズ大学	オカン大学	
トルコ・ドイツ大学	ファーティヒ大学	イスタンブル文化大学	オスイーイン大学	
イスタンブール文明大学	ゲディック大学	イスタンブル・メディポール大学	ピリ・レイス大学	
空軍学校	ハリチ大学	イスタンブル・サバハッティン・ザイム大学	サバンジ大学	
海軍学校	ウシュック大学	イスタンブル・シティ大学	ウスキュダル大学	

(出所) トルコ教育省ウェブサイトより作成

こうした大学のうち、政財界に多くの人材を送り込んできた大学としては、ボアズィチ大学が代表的である。1963年に米国人のロバート・クリストファーによって開校されたロバート・カレッジを起原に持ち、1971年に国立大学に改組された。ヨーロッパ側のギュネイ・キャンパス とクゼイ・キャンパスの他、アジア側のカンディリ・キャンパスなどの 6つのキャンパスを有する。学問分野としては、教育学部、科学・文化学部、経済・政治学部、工学部、応用学部、外国語学部を有する総合大学である。約 1 万人の学部生と約 3500 人の大学院生に対して、研究・教育を提供している。

ひとくちメモ 1 トルコの国旗と日本の国旗

既述の通り、トルコの国旗は赤地に白色の三日月と星を配した新月旗である。一方、日本の国旗は周知の通り、白地に赤色の太陽を配した日の丸である。

一見、全く異なったデザインの国旗と思われがちだが、よく観察してみると興味深い対象をなしている。まず、国旗の色はともに赤と白の二色のみの使用である。さらに、トルコの国旗が月という「夜」を想起させるデザインであるのに対し、日本の国旗は太陽という「朝」を想起させるデザインである。赤と白、月と太陽といった対象的な要素がちりばめられ、両国の国旗は二つ合わせて一つの世界を構成するかのような印象を受ける。

トルコと日本の結びつきの強さ、連携の重要性を示す一つのエピソードとして、在トルコ日本人の間で語られている。

